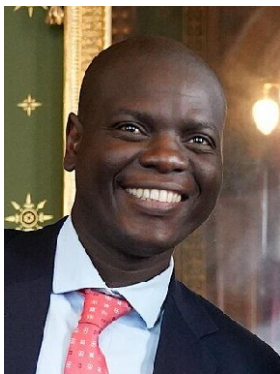


南アの対外政策を支えるもの

ロナルド・ラモラ (Roland Lamola) 南ア外相

Politics Web 2025 年 9 月 4 日

タボ・ムベキ財団主催第 2 回年次平和・安全保障対話における演説から



「私たちには三つの原則があります。それは進歩的国際主義、汎アフリカ主義、そして非同盟主義です」

我々は今、歴史の岐路に立っている

現代世界において、不確実性が高まり、危険な「力こそ正義」という政策が復活する危険がある。そのようなリスクを伴いながらも、現代は、新たな可能性を生みだすかも知れない。

もし各国が対立を協力に置き換えられれば、リスクは機会と希望とに転換するかも知れない。我々は敢えて言う。今は絶望すべき時ではないと...

一つ確かなことがある。それは非同盟であるということだ。

我々は霧の中から必ず抜け出すだろう。ただしそれは、アフリカ連合（AU）設立条約、APRM（アフリカ自主監視メカニズム）、アフリカ統治機構、アフリカ平和安全保障機構といった主要な戦略文書に明記されたアフリカの責務を、我々が真剣に受け止めるかどうかにかかっている。

現在の世界では、米国の一方的な関税によって引き起こされた地政学的緊張と貿易戦争により、不確実性が高まっている。当然生じる疑問は、こうした高まる地政学的緊張の中で非同盟とは何を意味するのかということだ。

わが国では、関税が経済に与える影響を理由に、米国に追随すべきだと主張する者さえいる。彼らは、関税が南アフリカ特有の現象ではないという事実を無視しているのだろうか？

我々のアプローチは今後も三つの原則に基づく。進歩的国際主義、汎アフリカ主義、そして非同盟主義だ。これらの原則こそが、アパルトヘイト後の南アフリカを形作った基盤である。

非同盟は自主独立ということ

非同盟は中立ではない。傍観者の立場から受動的に見ているわけでもない。

複雑な勢力関係が入り組む世界において、この姿勢はナイーブ過ぎるとか、あるいは隠された意図の隠れ蓑に過ぎないと批判する声がある。それは承知している。我が国では、南アフリカ政府に対し非同盟政策を放棄し米国の意向に従うよう求める声さえ上がっている。

しかし真の非同盟とは、自ら考える権利を積極的に、かつ原則に基づいて主張することである。他者の思惑の対象となるだけでなく、自らの思想を形成することだ。古い格言にある通り、我々抜きに我々に関する決定は許されない。

今日ガザに関して行われている、米国やカタールの取り組みを、我々は歓迎し支持する。その一方で、我々はアフリカもこの問題に主導的に取り組んでいること、その取り組みが真剣に受け止められるべきだと強調する。

我々にとっては非同盟こそが羅針盤である。外国勢力が描く星座ではなく、自らの星々―アフリカの尊厳、発展、自己決定という星々―によって確信を持って航路を定めていく。

道は常に平坦ではなく、嵐の中で羅針盤の針が揺らぐこともある。だが我々の目的地は明確だ。我々は特定の瞬間に存在する客観的条件を踏まえ、戦術的判断を継続するつもりだ。

この姿勢の道徳的根拠は進歩的国際主義

ここで第二の原則が働く。それが進歩的国際主義だ。

これは、私たちの行動が国内の最も深い価値観から切り離せないという信念である。それは人権と社会正義、法の支配である。

私たちは、公正な世界こそが持続可能であり、不正義の上に築かれた体制は本質的に不安定であることを知っている。これは崇高だがナイーブな理想だと批判する声もあるが、紛争という混沌のなかでは、道徳的指針において妥協してはならない。

彼らは問う。我々は虐殺者が犠牲者の命と引き換えに平和を贖うことを許すのかと。私はこう答える。正義と平和の均衡は解くべき方程式ではなく、管理すべき困難な緊張関係なのだ。

汎アフリカ主義はアフリカにおける非同盟の証

では、この進歩的なビジョンをどう形に表すか。それは第三の、そして最も重要なレンズを通して、汎アフリカ主義を通じてである。

汎アフリカ主義は、我々の自由が育つ土壌である。それは、我々の運命が結びついていること、その結合に対する揺るぎない信念だ。

一国が紛争で荒廃すれば、大陸全体が弱体化する。一国経済が繁栄すれば、他も引き上げられる。我々は 54 の孤立した島々ではない。広大な森なのだ。一本の木に生じた病害は、放置すれば森全体を蝕む。森の強さは個々の木にあり、個々の木が強さを森に負う。

アフリカの問題にはアフリカの解決策を

ここで南アフリカの歩みに触れたい。アパルトヘイトの闇から脱却し、我々は和解を選んだ。我々がここに集うのは説教するためではなく、さまざまな異なる道を探り、知恵を集めるためである。

コンゴ民主共和国東部、スーダン、南スーダンなどにおける平和構築の探求は、平和こそが発展の前提条件であるという認識に基づいている。我々はスーダンの関係者と継続的に対話し、停戦と対話の道を開くべく取り組んでいる。

南アフリカは C5 議長国（南スーダンについてのアフリカ連合特別委員会）として、南スーダンの全ての当事者に対し、再活性化された和平合意の条項を遵守するよう引き続き呼びかけている。これこそが「アフリカの問題にはアフリカの解決策を」という理念の真髄である。

この原則を恐れる者もいることは承知している。独裁者が隠れ蓑にするスローガンに堕するのではと懸念する人たちだ。彼らに言おう。君たちは我々の最大の試練を言い当てた。

この原則は独裁者の盾ではない。民衆のための剣だ。ウォレ・ソインカ Wole Soyinka が指摘するように「暴政に沈黙してしまった人々の間で、人間性は死んでいる」“The man dies in all who keep silent in the face of tyranny.”のだから。

これは私たち—アフリカ連合、地域機関、市民社会—への呼びかけである。指導者に責任を果たさせるべしと。真に効果的なアフリカ連合こそが、この構想の制度的核だ。調停し、人権基準を執行し、すべてのアフリカ人に正義と責務を求めなければならない。

産地国の利益 = 産地国主義に沿って解決

我々の大陸は今も紛争の傷を負い、傷口から血を流している。サヘルから大湖沼地帯に至るまで、数多くの紛争が大陸全体で激化している。鉱物資源を持たない国々が紛争を持ち込んで、他国の鉱物を自分のもののようになっている。これらの現象に対処しなければならない。

アフリカ大陸は一致団結して声を上げねばならない。重要鉱物資源をめぐる争奪戦は、まずは産地国の利益 = 産地国主義に沿って解決されなければならない。この点にこそ、我々の三原則が盾となり槍とり束となって生かされるのである。

生活水準の向上を実現せねばならない。これが南アフリカ経済外交の核心である。汎アフリカ主義は、アフリカ諸国が相互に貿易し、経済を統合し、国際舞台で一致団結して発言することを求める。

単一で自由なアフリカ貿易圏へ

課題は山積している。そのことは承知している——アフリカ大陸における「単一で自由な貿易圏」 African Continental Free Trade Area の完全実現を阻む官僚主義の山と物流の峡谷が存在する。その一つ一つの過程で失敗を重ねれば、それは、我々のビジョンの崩壊を意味する。

まずもって、SADC*との域内貿易を現在の 21% から大幅に上昇させなければならない。

SADC : 南部アフリカ開発共同体 (Southern African Development Community) 南部アフリカ諸国の生活向上のため、域内の開発、平和・安全保障を目的としさまざまな活動を行っている。

我々の経済的繁栄は、トップダウンの合意だけでは実現できない。国境など関係なしに、非公式経済で取引を行う、何百万もの男女に力を与えることが不可欠である。彼らの活動を簡素化し、その重要な役割を認識しなければならない。アフリカ大陸自由貿易圏（AfCFTA）は単なる経済協定ではなく、我々の結束を具現化したものである。

そして最後に、非同盟の立場こそが東西いずれの勢力に対しても「ノー」と言う勇気を与えてくれる。それがなければ、大国は植民地の前哨基地になれとの要求を突きつける。AfCFTAを成功させるには、その成功を可能にする流通インフラ——道路網、鉄道網、通信網、ワンストップ国境検問所など——を構築する必要がある。このネットワーク基盤を通じて統合を実現しなければならない。

バオバブの木のように

純粋な理想主義か純粋な冷笑主義を選ぶのは安易な道だ。我々の道はより困難である。それは原則に基づく現実主義の道であり、あらゆる試練によって鍛えられ、強固になる枠組みである。

我々はバオバブの木のようにあることを選ぶ。非同盟主義がシステムの根を深く固定し、国際地政学の風に倒されることを防ぐのだ。

我々の進歩的国際主義（多国間民主主義）は幹である。強固で原理原則に則り、常に正義の光を指し示す。

そして我々の汎アフリカ主義は広大に広がる樹冠である。その下に住まう全ての人々に、相互に支え合いながら、避難所と糧を提供する。

これが、我々が保つ均衡である。我々が受け入れる挑戦である。「力こそ正義」の教義に対する我々の解決策である。

パトリス・ルムンバは、アフリカは自らの歴史を自ら書き記さねばならないと述べた。そして、北（の世界）がそうであるように、南（の世界）も栄光と尊厳の歴史でなければならないと述べた。

いま、大湖沼地帯の状況は、まさにそのことを求めている。

ありがとうございました。

【翻訳チェック 鈴木頌】